

Ⅲ. 調査の結果

第1章 日本大学学生の基本特性

1.性別

女子学生の比率は27年前と比較して、生物資源科学部・法学部で30ポイント以上、商学部・経済学部・歯学部で20ポイント以上増加。全体では12.3%増。

本学の14学部全体（第一部のみ）の女子学生比率は35.5%でした。実際の女子学生の比率は31.3%（平成27年5月現在の第一部在籍者）ですから、女子学生の方が調査協力がやや高かったこととなりますが、分析上支障のない範囲の偏りと考えられます。

学部別に見ると回答者の男女比は大きく異なり、女子学生の比率が芸術学部と薬学部では60%台、工学系学部（工学部・理工学部・生産工学部）では10%台となっています。

第1回調査が行われた昭和63年度（27年前）と比べると女子学生の比率は12.3ポイント増加しています。生物資源科学部・法学部では30ポイント台、商学部・経済学部・歯学部では20ポイント台の大幅な増加が見られます。経年変化を見ると、平成12年度以降女子学生の比率はほぼ横這いでしたが、平成27年度は3年前より2.8ポイント増加しています。

図1-1 性別(平成27年度全体・学部別・経年変化)

	女子学生の比率の変化		昭和63年度との差
	男性	女性	
平成27年度全体	64.5%	35.5%	12.3
法学部	58.3%	41.7%	30.3
文理学部	57.1%	42.9%	8.1
経済学部	70.0%	30.0%	21.8
商学部	58.6%	41.4%	26.8
芸術学部	32.6%	67.4%	12.9
国際関係学部	55.9%	44.1%	-2.8
理工学部	84.6%	15.4%	8.5
生産工学部	83.1%	16.9%	12.5
工学部	89.3%	10.7%	9.0
医学部	67.9%	32.1%	5.9
歯学部	50.4%	49.6%	20.4
松戸歯学部	58.8%	41.2%	16.5
生物資源科学部	50.9%	49.1%	36.5
薬学部	36.8%	63.2%	-5.2
昭和63年度	76.7%	23.2%	-
平成3年度	75.6%	24.2%	1.0
平成6年度	71.4%	28.4%	5.2
平成9年度	68.7%	31.3%	8.1
平成12年度	66.6%	33.2%	10.0
平成15年度	67.0%	33.0%	9.8
平成18年度	65.1%	34.9%	11.7
平成21年度	66.5%	33.5%	10.3
平成24年度	67.3%	32.7%	8.5
平成27年度	64.5%	35.5%	12.3

2.入学状況

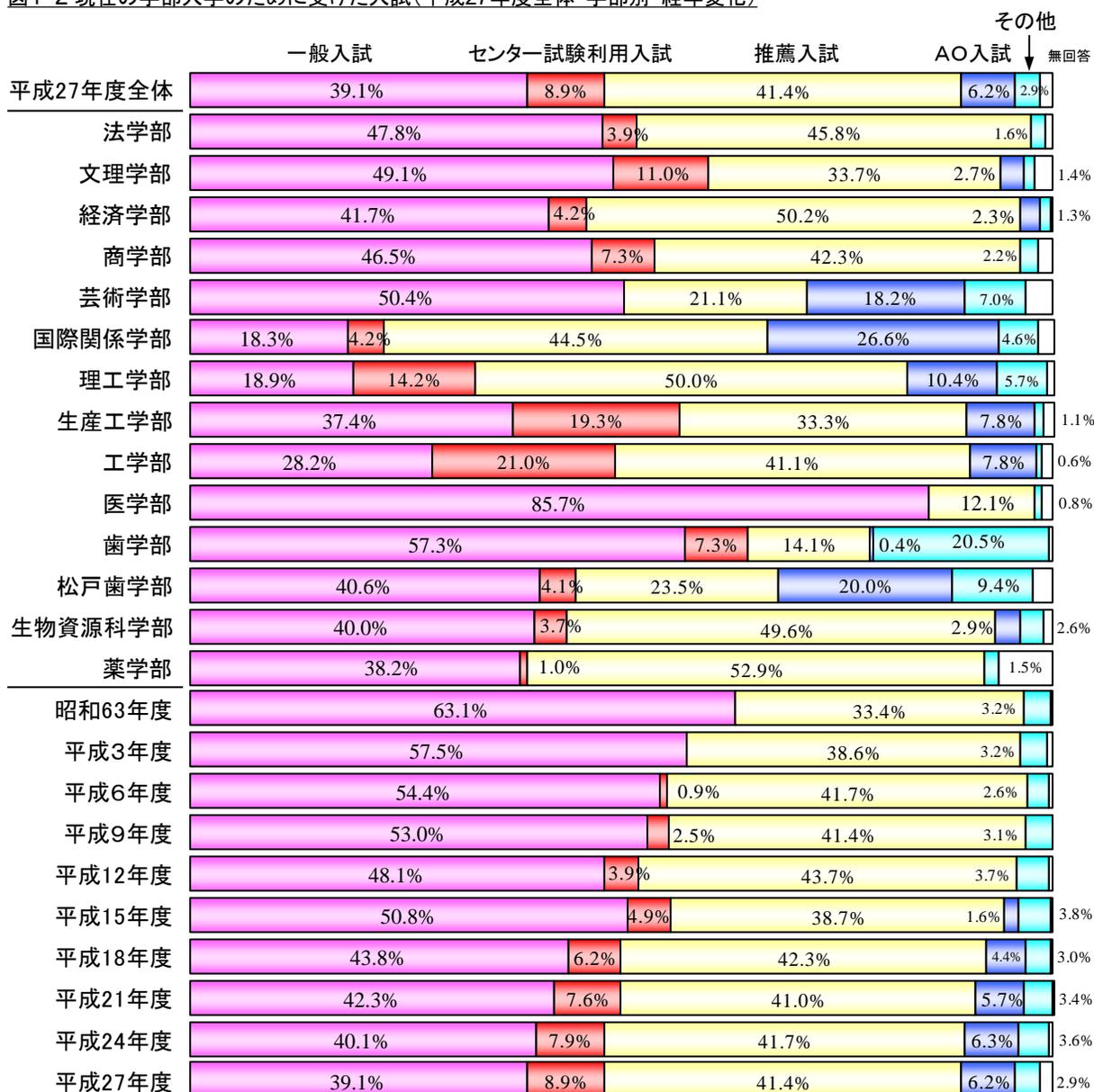
推薦入試による入学が一般入試による入学を若干上回る。
センター試験利用入試の増加が続き、入学形態の多様化傾向が続く。

本学への入学状況を見ると、推薦入試が41.4%で最も比率が高く、一般入試が39.1%で続いています。平成4年度から採用されたセンター試験利用入試が8.9%、平成13年度から実施されているAO入試は6.2%となっています。

一般入試入学の比率は医学部で85.7%と非常に高く、センター試験利用入試は工学部・生産工学部など工学系学部で高く、AO入試は国際関係学部・松戸歯学部・芸術学部で高いといった特徴が見られます。

経年変化を見ると、一般入試による入学者の比率が減少し、センター試験利用入試は増加する傾向が続いており、推薦入試とAO入試は3年前と同水準となっています。

図1-2 現在の学部入学のために受けた入試(平成27年度全体・学部別・経年変化)



3.出身高校等

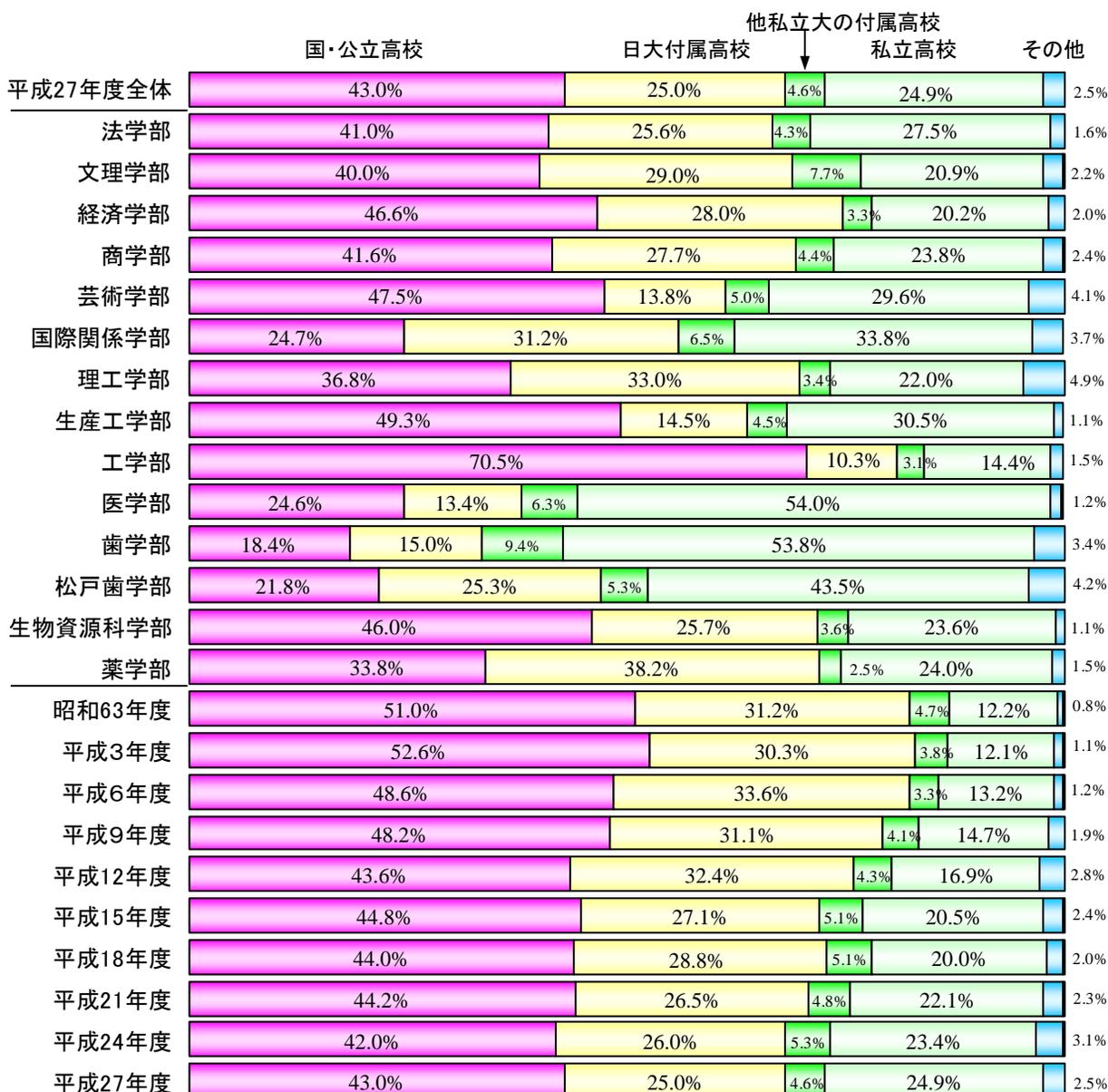
国・公立出身が43％，次いで日大付属高校出身と私立高校出身が各25％。
工学部は国・公立出身が7割，医学部・歯学部は私立高校出身が過半数。
私立高校出身者の比率は平成6年度から概して増加傾向。

本学学生の出身高校等を見ると，国・公立が43.0％で比率が最も高く，次いで日大付属高校と私立高校がほぼ同率（約25％）となっています。

工学部は国・公立高校出身が70.5％を占めており，医学部と歯学部では，私立高校（附属以外）出身が過半数を占めています。

経年変化を見ると，国・公立高校出身者は平成12年度から横這い傾向，日大付属高校出身者は平成12年度までは30％台でしたが平成15年度以降概して減少傾向，私立高校出身は平成6年度以降概して増加傾向が続いています。

図1-3 出身高校等(平成27年度全体・学部別・経年変化)



(注) 「その他」は，高卒認定合格，外国所在の学校，大学・短大・高専卒業，その他。

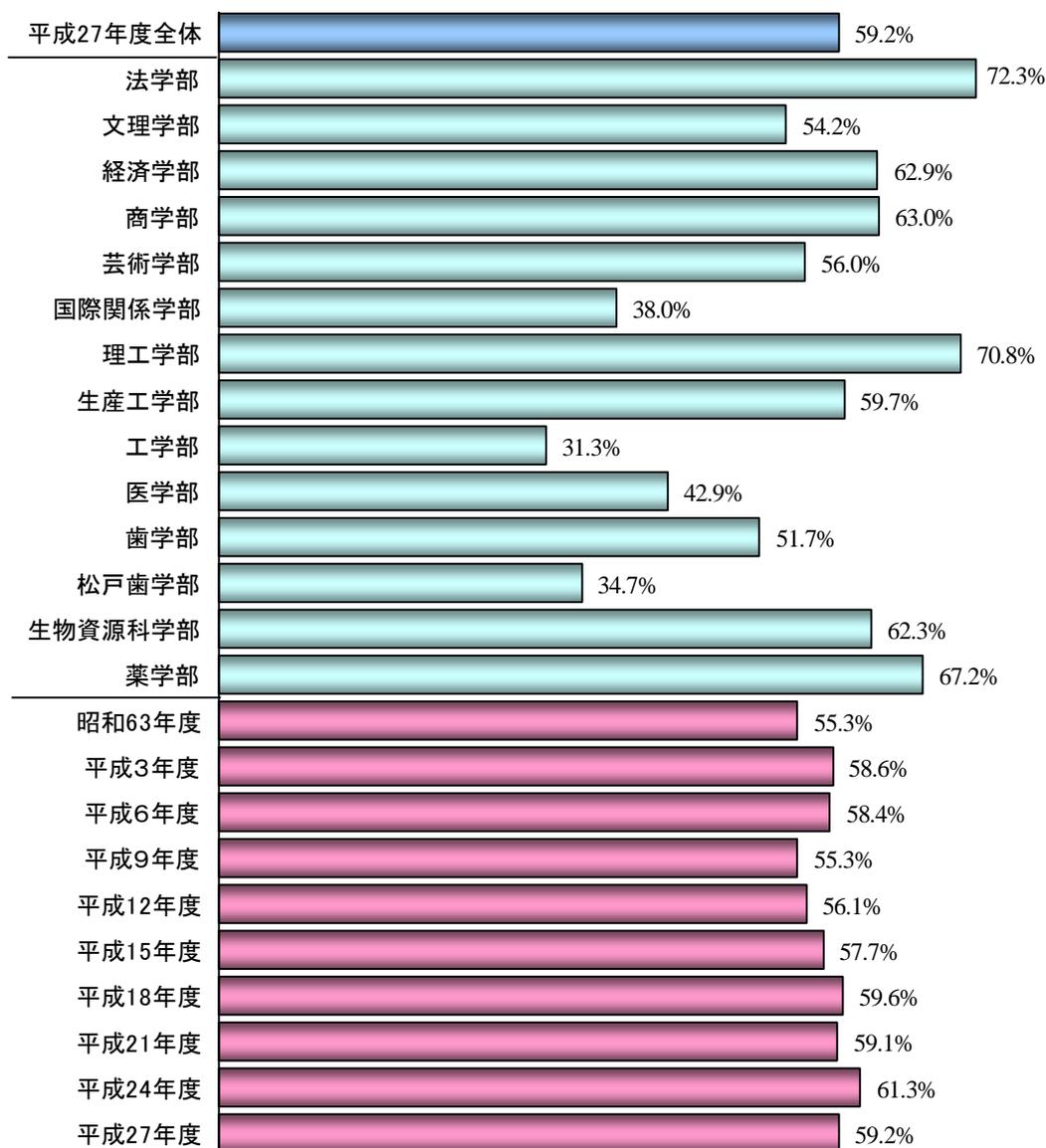
4.住居形態

自宅通学者の比率は59.2%。3年前より減少に転じる。
 本学の経済支援策としての新しい学生寮運用などにより学生の住居形態に変化。

住居形態について全体で見ると、自宅が59.2%で最も比率が高く、次いでアパート・マンションが32.2%となっています。食事つきの下宿・貸間・学生ハイツ等は3.6%とごく少数です。自宅通学者に焦点をあてて見ると、キャンパスが都心にある法学部は72.3%と高くなっていますが、福島県郡山市にある工学部で31.3%、千葉県松戸市にある松戸歯学部で34.7%、静岡県三島市にある国際関係学部で38.0%と低く、学部により学生の住環境に大きな差があります。

また、本学では「創立130周年記念事業」の一環として学生に対する経済支援を拡充するため学生寮の建設を推進しており平成26年度から新しい寮の運用を開始しています。平成27年度調査では本学の学生寮居住者が3.0%と3年前の1.6%より大幅に増加している点が目立っています。

図1-4 自宅通学者の比率(平成27年度全体・学部別・経年変化)



5.通学時間

通学時間の中央値は51.0分。商学部の69.2分から工学部の11.8分まで学部間に差。文理学部では3年前より9分短縮。

本学学生の通学時間は「15分以内」が20.2%、「16～30分」が13.1%、「31～60分」が24.3%となっており、30分以内が33.3%、1時間以内が57.6%、1時間半を超える学生も17.7%います。本学学生全体の通学時間の中央値を求めると51.0分となります。

通学時間の中央値は、学部によりバラつきが大きく、商学部（69.2分）では1時間を超えています。工学部（11.8分）・国際関係学部（19.1分）・松戸歯学部（21.0分）・医学部（22.1分）では約20分以内と短くなっています。学部ごとに、通学時間の中央値と自宅通学率の関係を見ると、自宅通学率が高い学部ほど通学時間が長いという傾向が顕著に表れています。両者の相関係数は0.954と非常に高い数値となっています。

さらに、平成24年度からの変化を見ると、文理学部では自宅通学者の比率が大幅に減少し通学時間が66.5分から57.5分と9分短縮されている点に注目できます。

図1-5 平均通学時間と自宅通学者の比率の相関図(平成27年度全体・学部別)

